

東北 VALUE SIGHT 宮城



株式会社SAKO建築設計工社 代表
迫 慶一郎 (さこ・けいいちろう)

1970年 福岡県生まれ
1994年 東京工業大学卒業
1996年 東京工業大学大学院修了
1996-2004年 山本理頭設計工場
2004年 SAKO建築設計工社設立
2004-2005年 米国コロンビア大学客員研究員
文化庁派遣芸術家在外研修員

株式会社SAKO建築設計工社
東京都中央区日本橋本町3-2-12 日本橋小楼301
TEL 03-6265-1812

東日本大震災からの復興のため、新しいまちづくりが考案されている。SAKO建築設計工社の迫代表による「東北スカイビレッジ構想」である。高台がない地域に高台をつくるという発想で、「人口地盤」を設置し、津波にも流されないまちをつくるという。

『東北スカイビレッジ 構想』 実現に向けて

北京で起業し、中国を拠点に建築の設計や都市計画に携わって来たなかで、2008年に起きた中国の四川大地震の際には、四川省に耐震性の強い校舎を無償でつくり贈るというプロジェクトを行ってきた。そんな背景もあり、東日本大震災の状況を聞くにつれ、母国に対して何かできないかという気持ちが募り、当時は北京で悶々とした日々を送っていた。

2011年の4月に、菅直人元総理大臣から提唱された「高台移住計画」を知り、合理的かつオーソドックスな計画案に合点がいくとともに、いくつかの疑問を抱くようになった。

地元で聞こえてくる「現地に戻りたい」「現地を復興したい」という現地住民の意向を尊重し、慣れ親しんだ地元において地震・津波に対して安全・安心な住まい方ができないだろうか。

特に、高台のない仙台平野のような平野部において、もう一度沿岸部に安全に住み続けるために提案したのが、『東北スカイビレッジ構想』である。

基盤に比較し、より良い景観形成への寄与、少子高齢化社会における地方都市のあり方、1次産業の6次産業化、膨大ながれきの処理への貢献など、さまざまな復興課題・社会的要請について同時に最適化しながら、次世代型のエネルギー/IT技術/交通などの最新技術を駆使して、パッケージ化して世界に発信できるモデルになると考えている。スカイビレッジの建設には、いまのところ、350億から500億円程度の建設費がかかると試算しており、国の補助金に加え、県や市、民間の資金を活用しながら実現を目指す必要がある。



人口地盤
横から

スカイビレッジの基本的な考え方

具体的には、海拔20mの高さで浸水しない堅牢な人工地盤を設置する。この東京ドーム程の大きさの人工地盤は、大規模な津波にも対抗しうる高さや強度を兼ね備え、卵形の平面形状が津波をかき分ける効果を果たす。人工地盤の内部は、安全で必要十分な空間を確保し、被災した水産業やロジスティクスだけでなく、新たに街を活性化させる商業なども融合させて、新しい産業インフラとして整備する。地盤上部は、地震や津波など大規模災害の発災時における緊急避難・備蓄拠点として、一時居住の受け入れや仮設住宅用地としての防災公園空間を備えながら、広大な海が見渡せる高付加価値な商業・業務施設となる計画である。

自然環境の保全や環境負荷の低減、従来型の防災

漁港を組みこむ

震災からしばらくは、この人工地盤が高台の無い仙台平野に点在するイメージで計画を進めていたが、半年ほどたった後に、この地盤を海にせり出してみたらどうかと考えた。

漁師は津波が起こった時に、命がけで自分たちの資産である船を守ろうとする。津波で流されて船が凶器となったことも考えると、この船もどうかして守れないかと考えたのが、『漁港バージョン』のきっかけだった。

海にせり出したスカイビレッジの一部が屋内化し

た漁港となり、そこに係留された船は、津波だけではなく高潮時にも守られる。また、漁港とともに水産加工場を集約させることで、新鮮な魚をそこで加工し、出荷する水産業の拠点ともなる。

完全屋内型の漁港は、実現すれば日本では初めてとなり、鳥害などの被害を受けにくい、品質・衛生管理を徹底することが可能となる。これは、日本の水産業がヨーロッパをはじめとする海外へ輸出する際に課題となっている衛生管理基準（HACCP）を取得する際に有利な構成となり、漁港に新たな漁船を誘導し、活性化することも期待できる。



漁港バージョン
模型写真

名取市における構想

スカイビレッジを積極的に導入しようとしてくれているのが、佐々木一十郎・名取市長である。名取市閑上地区は、約2100世帯、5700人が住んでいたが、壊滅的な被害を受けた。市長自身も閑上にあった自宅を津波で失ったが、このまちを何とか現地再建しようと計画している。

このまちの再建にあたって、国交省による一次防衛としての海岸・河川堤防、県・市による2次防衛としての河川・道路堤防に加え、貞山堀という運河より西側を土盛りし、かさ上げした住宅地区を計画

している。しかし、堤防の建設や住宅地のかさ上げという対策だけでは完全に津波の被害を防ぐことができず、漁港がどうしても海に向かって口を開ける形となる。そこで、まちの先端にスカイビレッジを置き、漁港を地盤内に収納しながら、船の舳先のように防潮堤の切れ目から侵入して来る津波を左右にかき分ける役割を持たせている。この舳先が後背する住宅地を守るという、まちを大きな船に見立てた構想で『オンリーワン』の魅力あるまちづくりをめざしている。



名取市計画

これから

このところ、そびえ立った防潮堤が永遠と続く新たな海岸線の風景に、嘆きの声が多岐なメディアから聞こえるようになった。加えて、現状の復興計画では海岸線一帯が災害危険区域とされ、人が住めないエリアになる予定となっている。果たしてこれが日本の復興のあり方で良いのだろうか。海とともに生活して来た日本人が、これからは海と親しみながら安全・安心に暮らす術を模索して行く必要があるだろう。そして世界に対して「日本はこう復興から立ち上がった」と誇れるような新しい復興のあり方を提示することが、今後の日本のために必要なことなのではないだろうか。その思いを強くもって、今後もスカイビレッジを推進して行きたい。